

「産婦人科」を選ぶことに真っ先に反対したのは内科医の父だった。

「純粋な親心からでしょか」

岡山市内の総合病院。産婦人科の女性勤務医(三九)は振り返る。

「女性であることがプラスに働きそう」と希望した。でも父も、その知人の産婦人科医までもが「やめておいた方がいい」と他科を勧めた。

実際、お産の現場に飛び込んでみると、しんどさは予想以上。以前勤務した病院では、帰宅がいつも午前零時を回り、三日に一日は病院に泊まり込んだ。

医療過誤訴訟の多さもストレスだ。産婦人科は、医師一人当たりの訴訟件数が診療科別で最も多い。医師が最善の手を尽くしても、時に異常分娩は起きる。周囲には訴えられた医師もい

た。

個人で加入した損害保険の賠償限度額を一億円から二億円に増やした。カルテを書く時、証拠記録を残しているようで「いやな感じがする」という。

二〇〇四年には、福島県で帝王切開手術を受けた女性が死亡し、産婦人科医が業務上過失致死などの罪で逮捕された。全国の医師らに波紋を広げたこの事件を、女性勤務医は「一生懸命助けようとした医師が犯罪者にされてしまうなんてやりきれない」と嘆く。

もちろん、やりがいも感じてはいる。「でも、そんな厳しい話を聞くと若い人には抵抗があるのかなあ」。

約百人いた大学の同級生も、産婦人科の道を選んだのは自分を含めて二人だけだった。

「(産婦人科に対して)あまりにマイナスのイメージ

③先細り

産おむき



若手の医局員を指導する岡山大の平松教授。産婦人科の先細りに頭を悩ませる

ジが先行している」

岡山大病院産科婦人科の平松祐司教授(五五)は頭を抱える。医局員は現在、二十

五人。二十年前の約半分だ。以前は毎年十人以上が入局してきたが、今は数人がや

っと。医学生や研修医にどう魅力を伝えるかに苦心する。

特に〇四年度に始まった臨床研修制度で、新人医師が二年間複数の診療科を回るようになってから不人気ぶりが著しい。他科に比べて産婦人科の「大変さ」がよりリアルに伝わるからとされる。

岡山県内の病院で研修中の男性医師(三七)は「先輩から『昨日はとつとつ眠れなかった』とか『産科は当直や訴訟が大変だよ』とよく聞かされる」と話す。

平松教授は「勤務負担や訴訟リスクの軽減を図っていかないと、若い人が産婦人科を選んでくれない」

と将来に危機感を募らせ

日本産婦人科学会は昨年六月、「産科医療体制関連アクションプラン」を策定

医師の給与や労働条件などの待遇改善を国や自治体に求め、医学生・研修医に産婦人科の魅力をアピールするDVDやニュースレターなどを作製した。

岡山大では今春、入局者が久しぶりに七人に増えた。「改善の兆しはある」と平松教授。ここ七年、入局者がゼロだった川崎医科大学(倉敷市松島)も男性医師が一人入る。

だが、医師の養成には時間がかかる。入局者の先細りは、大学から地域の病院へ派遣する医師不足へとつな

負のイメージ 学生敬遠